なぜ、今、731部隊か

湘南科学史懇話会

2018.5.3

自己否定からの出発

根底的批判の視点：批判的科学技術論のために

科学技術論サマーセミナー　　2016.9.2

1. 常石にとっての時代の流れ
2. 出会ったコトバ：広重徹、1965。山本義隆、1969。
3. 67年ころの状況：中村禎里、1997
4. 常石のこれまでの研究、『結核と日本人』の位置付け
5. なぜ結核なのか

研究者が戦争に協力する時
― 731部隊の生体実験をめぐって ―

２０１８．４．１４

1. ７３１部隊＆石井機関
2. 日本の30年代
3. 「防疫研究報告」 石井機関紀要
4. 石井機関紀要の論文が博士論文に
5. 博士論文とはどんなもの
6. 学位審査の実態
7. 学と軍の癒着の実態
8. なぜ今？ 『永続敗戦論』の世界＝明治維新150年

1-1常石にとっての時代の流れ

年号	できごと	備考
60	安保闘争	
65～	三里塚闘争（66年戸村一作、反対同盟代表就任）	
66	東京都立大学理学部物理学科卒業	
68	エンタプライズ佐世保寄港	
68-69	学園闘争（学生革命・学生叛乱、先進工業国）	水俣、王子野戦病院
70	大阪万博	
71	科学史国際会議（モスクワ）	広重徹と中山茂
72	連合赤軍浅間山荘事件	
73	長崎大学に赴任	
74	「むつ」放射線漏れ	
79	スリーマイル島原発事故	
86	チェルノブイリ事故	
89	陸軍軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会→'93-4:731部隊展	
95	阪神淡路大地震・地下鉄サリン事件・金融破綻→'01生物兵器（BC兵器）	

1–2–1出会ったコトバ：広重徹、1965

- 「既存のものに対する批判をたえず提起し、新しいものを作りだしてゆくという学問の基本的機能」（『科学と歴史』1965年６月、みすず書房、p.3）。
- 「歴史とは現在への批判である……自己の立っている基盤をもふくめて現在をたえず批判的にみる、ということのできない人々には歴史を語る資格がない」（同上、p.48）

1-2-2出会ったコトバ：山本義隆、1969

「各闘争委員会の発するアジビラの多くは、全員の徹底的な討論、総括を踏まえて作成されている。総括はより厳しく自己を否定する過程であり、討論はより強固に自己を武装する過程である」。（『砦の上にわれらの世界を』1969年4月、亜紀書房、p.3）

1–3　67年ころの状況：中村禎里、1997

「『日本のルイセンコ論争』の原稿が仕上がったとき、わたしはその出版を望んだ。ところが二つの出版社から断られた。やがて私は高校の教師の職についたが、研究の継続と教育・校務・組合活動の両立に苦しんだ。私の生きがいは研究のほうにあった。だから、ずるずるとなりゆきに任せると、研究のみに多くの暇を費やし、教育は投げやりになると予測された。鬱屈した精神状態から脱し、心の平静にたっするために、私は研究を断念しなければならないと決断した。そして研究生活の最後の自己確認として、一回分のボーナスをはたきタイプ印刷本を自費でつくることにした。そして印刷の進行中に、立正大学教養部への就職の誘いをうけた……わずかの部数知人に配っただけのタイプ印刷の本が、科学雑誌や書評新聞で紹介されるのは異例であるが……おそらくそれがみすず書房の故松井巻之助氏の目に止まり、松井氏が出版の話を持ちかけてくださった……そこで思うのだが、みすず書房の好意を得ることもなく、また大学の教師の職につく機会もないままで、研究をあきらめ高校の教育に専念していたとしたら、本書は、前身のタイプ印刷のままで終わっていただろう。私は、運に恵まれていただけの話ではないか。本書ていどの論稿は、あちこちで日の目を見ることなく筐底にとどめられ、消失していきつつあるのではないか。そのことがとても恐ろしい。かくて私の思いは、不利な境遇で奮闘する研究者、アマチュア研究者の問題にもどっていく」。

『ルイセンコ論争』中村禎里、1967、この引用は97年版の「三〇年をへて」、pp.290-1

1-4　常石のこれまでの研究、『結核と日本人』の位置付け

表題（出版社）	刊行年
「科学の制度的定着」（『現代の科学・技術論』中村禎里編、三一書房）	1972
消えた細菌戦部隊(海鳴社)(鈴木善次評：「科学史研究」Ⅱ、21(1982)、pp. 122-3)	1981
細菌戦部隊と自決した二人の医学者（新潮社、朝野富三との共著）	1983
標的・イシイ（大月書店）	1984
奇病・流行性出血熱（新潮社、朝野富三との共著）	1985
医学者たちの組織犯罪（朝日新聞社、視点が731部隊から防疫研究室へ）	1994
七三一部隊（講談社現代新書）	1995
謀略のクロスロード（日本評論社）	2002
戦場の疫学（海鳴社）	2005
結核と日本人（岩波書店）	2011
原発とプルトニウム（PHPサイエンスワールド新書）	2010
日本の原子力時代（岩波書店）	2015
3.11が破壊したふたつの神話：原子力安全と地震予知（神大評論BL）	2015
化学兵器犯罪（講談社現代新書）	2003
NHK教育テレビ、人間講座「20世紀の化学物質」	1999

1–5　なぜ結核なのか

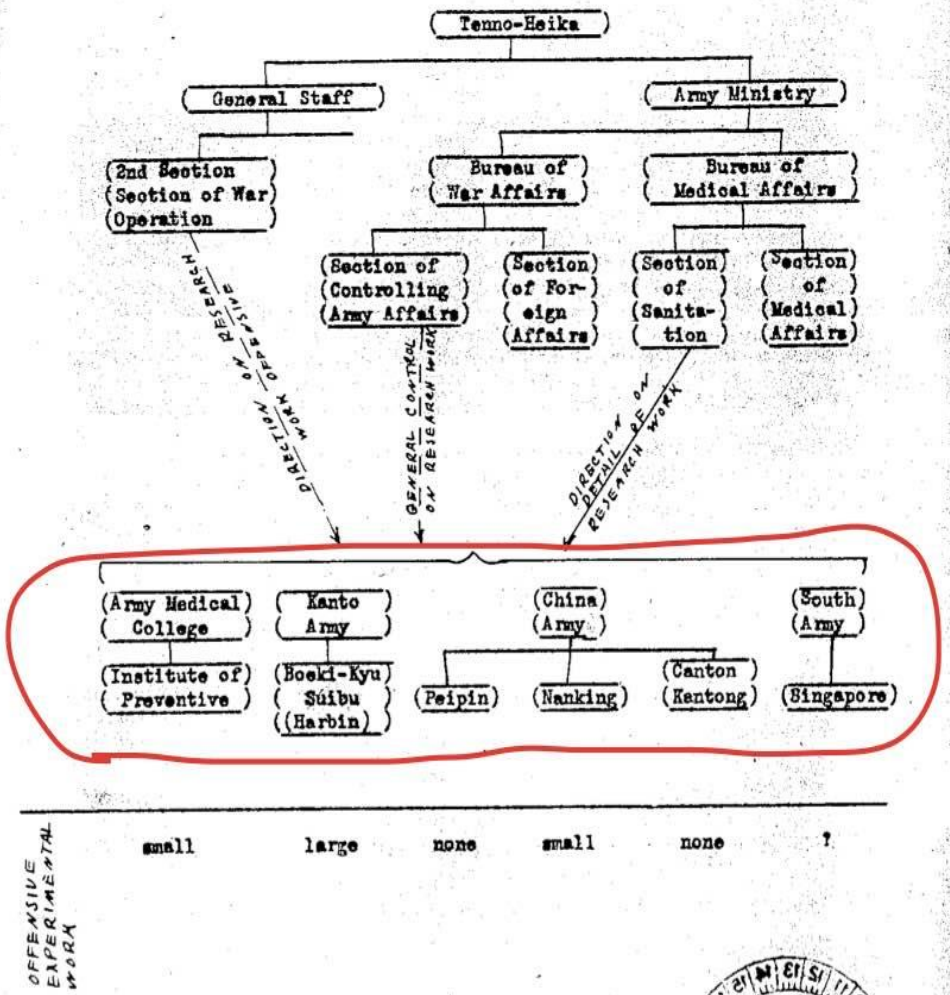
- 産業化・都市化・近代化
- 『女工哀史』→石原修
- 工場法
- 小泉親彦→厚生省
- 日本医学界（科学界）

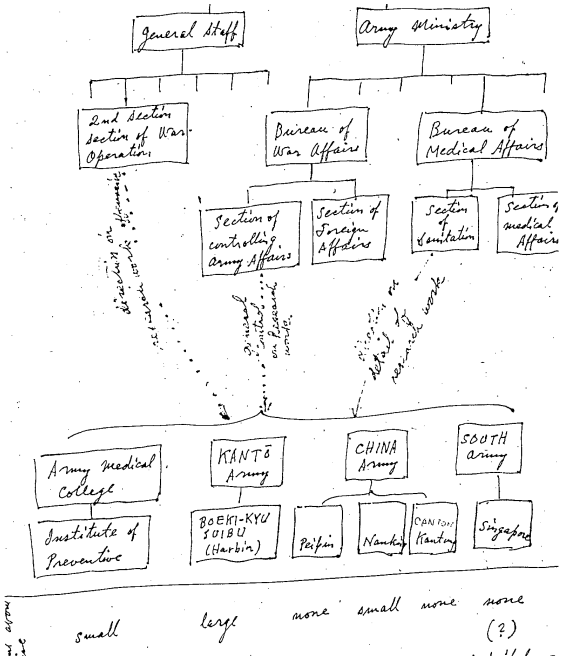
- 見通しなどないのだ

　タブーへの挑戦……

　ACジャパン：医学の敗北と広報の勝利

2-1 731部隊&石井機関

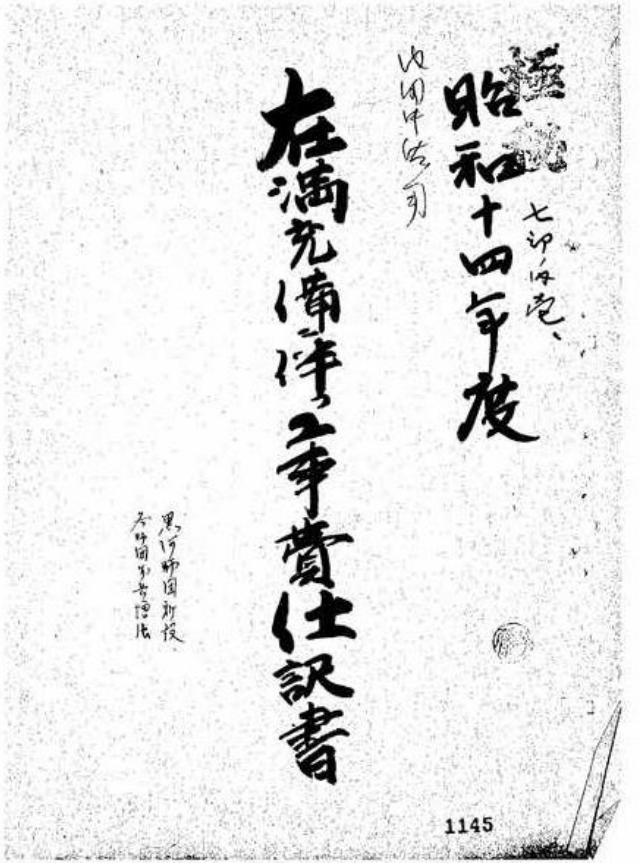




1945.10.5 内藤→M.Sanders

2-2　日本の30年代　1
満州事変が石井機関を作った

- 極秘の「在満充備に伴う工事費仕訳書　昭和14年度」（C13050323800）
- 臨時軍事費特別会計：戦前の日本の特別会計の1つで、戦争における作戦行動に必要な経費を一般会計から切り離して、戦争の始期から終期までを1会計年度とみなして処理
- 〔1〕日清戦争、〔2〕日露戦争、〔3〕第一次世界大戦およびシベリア出兵、〔4〕日中戦争（日華事変）および第二次大戦、の4回
- 4戦争以外の北清事変、山東出兵、満州事変はいずれも臨時事件費で処理
- 各会計をつなぎ合わせると、1894（明治27）年6月から第二次大戦終了まで、わずか5か月間の中断があるだけで継続していた



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

2-2　日本の30年代-2

満州事件費：デフレ政策からインフレ政策へ;「非常時財政」

- 陸軍省軍事課、予算班長代理西浦進「陸軍の予算総額は2億円に満たなかった……昭和8年度の予算編制……4億8千万円程……当時としては古今未曾有の大予算」（『昭和戦争史の証言』、原書房、1980.9）
- 防疫研究室の建築と設備のための一時金総額56万円が満州事件費から支出、10億円相当
- ハルビン本部の建設に満州事件費から309万円が支出、52億円強

2-2　日本の30年代　3　悲劇と茶番？

年号	出来事
1923	関東大震災（2011年；東日本大地震）
1925	治安維持法、普通選挙法（2013年；特定秘密保護法）
1929	世界大恐慌（2008年；リーマンショック）
1931	柳条湖事件（満州事変）
1932	防疫研究室発足、満州国設立（201?年；米抜きTPP）
1933	日本学術振興会研究費創設（グループ研究へのシフト）（2015年；安全保障技術研究推進制度） 河上肇検挙、小林多喜二虐殺、「非常時」
1935	『日本イデオロギー論』（戸坂潤、38年検挙40-44年保釈その後長崎原爆の日に獄死） 天皇機関説事件
1936	満州第731部隊（関東軍防疫部）発足

日本政府、国連部会の「報道の自由」勧告を拒否

2018年3月8日7時18分

http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs_newseye3310511.html?mode=pc

報道の自由度ランキング

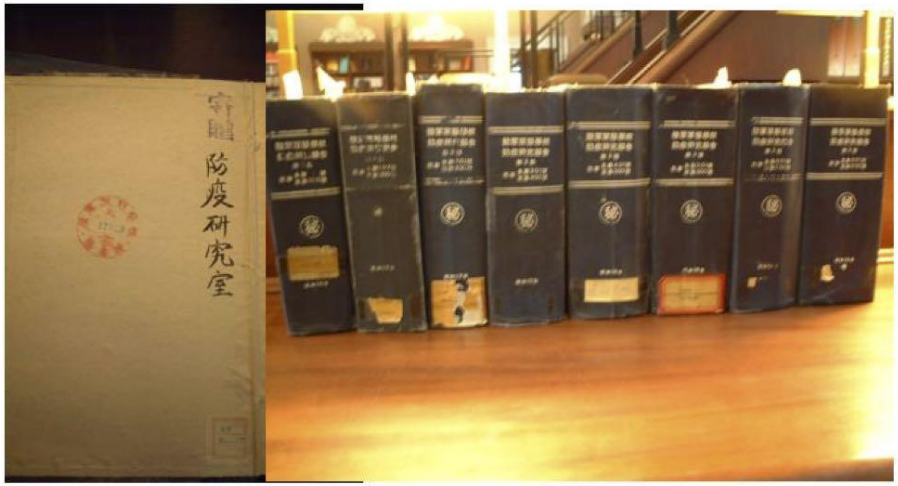
	2010 年	11	12	13	14	15	16	17
フリーダムハウス	32	32	37	40	42	41	44	48
国境なき記者団	11	－	22	53	59	61	72	72

https://rsf.org/en/ranking
https://freedomhouse.org

2-3　石井機関「防疫研究報告」紀要１

『防疫研究報告』2部　執筆者

機関名	研究室/部隊/大学/事業所名
陸軍軍医学校	防疫研究室、防疫部、軍陣防疫学教室、防研調査室
在京陸軍機関	材料本廠、臨時東京第一陸軍病院
在外部隊	北支那防疫給水部、中支那防疫給水部、南方軍防疫給水部、ビルマ派遣弓第6834部隊長（第33師団防疫給水部）、第5防疫給水部、関東軍防疫給水部、第12防疫給水部、中支那防疫給水部富士部隊、関東軍防疫給水部大連研究所、北支派遣乙第1856部隊、吉住部隊
大学	慶応大学、長崎医大、京都大学、大阪大学、金沢医大、北里研究所、廣島文理科大学、北海道大学、千葉医大（防研嘱託として執筆）
民間会社	日本特殊工業株式会社、高砂鐵工、株式会社浄水工業所



米国議会図書館所蔵分(2004年5月)

- ✧ 少なくとも25人の研究者が『防疫研究報告』2部の論文を学位論文として利用している
- ✧ 7人の学位論文に改ざんその他の問題点が明らかとなっている
- ✧ 『防疫研究報告』1部の論文だと、改ざんという形式ではなく、内容に問題が見られる
- ✧ 浅川賞　1958年受賞：谷口腆二 2部 第632号1943（小林六造記念賞【日本細菌学会】）

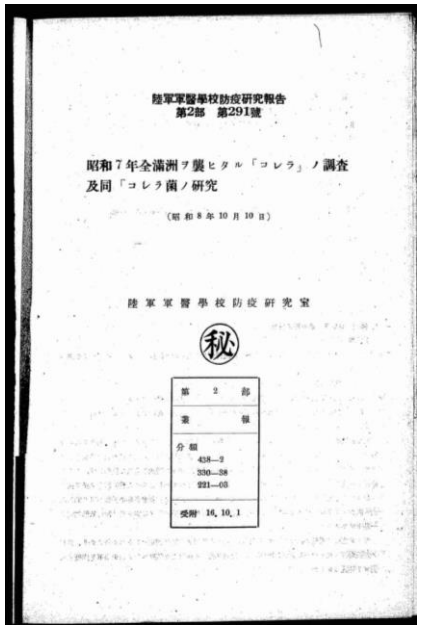
2-3　石井機関その規模　2

- 731部隊発足当時の定員は500人、将校10%
- 「関東軍防疫部各部将校、高等文官職員表」:軍医将校が22人、薬剤将校が4人、医学博士が9人、理学博士が1人。将校および高等文官の定員は83人だが、実員は36人で、47人が欠員（編制改正詳報提出の件、C01002723800、昭和１３年「陸満機密大日記 第２冊１／２」）
- 38年3月10日付で京都帝国大学の博士号を持った研究者8人が技師として着任
- 1919年創設のた陸軍科学研究所（科研）、32年8月8日現在で1部の将校と技師という研究要員は19人（博士2人部長含め）、2部は40人（博士5人部長含め）（陸軍科学研究所職員表・陸軍工科学校職員表　昭和7年８月８日調、Ref.C13070919200、陸軍部隊職員表　（学校・官衛）　２／２　昭和７年）
- 東大伝染病研究所、32年の定員は「所長、所員、技師3、書記6、技手25、薬剤手3、看護長3」

2-3　石井機関 予算　3

- 1931年の工学分野の研究機関349の研究費総額は3千万円。軍の機関17、それを除くと研究機関数は332で、その研究費総額は1572万円（人件費が703万円、研究費が705万円、その他が164万円）、一機関あたり4万7千円（1億円）強と。3千万円引く1572万円→1428万円が軍の17機関の研究費。一機関あたり84万円だ（広重徹『科学の社会史』）
- 学振第10小委員会（宇宙線・原子核、仁科）：34年から42年の9年間で444,690円。年平均5万円弱
- 石井機関への研究費の支出は31年から。31年5.2万円、32年が22.5万円、35年107.3万円、37年が911万円で、7年間で1,262万円。38年には初年度設備費として356万円が計上（「世界列強元首ノ締結セル細菌戦禁止條約及該條約ノ成果並ニ将来ノ対策」満州第七三一部隊調査課（昭和十七年二月十八日）「関東軍細菌兵器に関する文献集」（昭和14-17年　関東軍防疫給水部　石井(ママ)技師訳）　防衛研修所戦史室)

2-3 石井機関　4　期待の原点32年、コレラ流行


陸軍軍醫學校防疫研究報告
第2部　第291號

昭和7年全滿洲ヲ襲ヒタル「コレラ」ノ調査
及同「コレラ菌ノ研究

（昭和8年10月10日）

陸軍軍醫學校防疫研究室

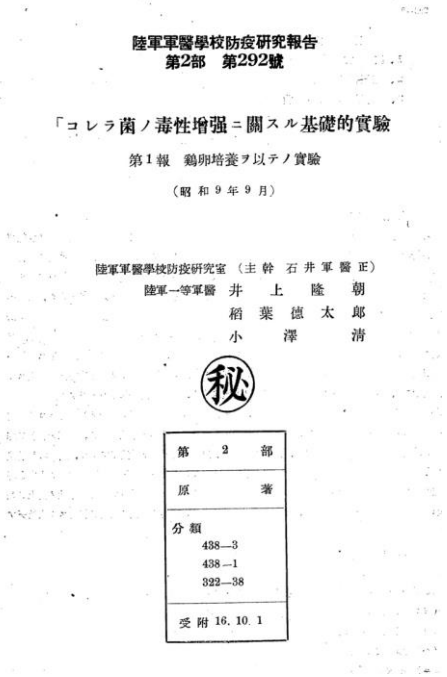
秘

第	2	部
業		報

分類
438—2
330—38
221—65

受附 16. 10. 1

石井は1等軍医1人と2人の技術職員を連れて32年の夏から秋にかけて満州でのコレラ流行を調査し、菌株を収集した。防研に持ち帰った菌株を3人の1等軍医が分析


陸軍軍醫學校防疫研究報告
第2部　第292號

「コレラ菌ノ毒性增强ニ關スル基礎的實驗

第1報　鷄卵培養ヲ以テノ實驗

（昭和9年9月）

陸軍軍醫學校防疫研究室（主幹　石井軍醫正）
陸軍一等軍醫　井　上　隆　朝
稻　葉　德　太　郎
小　澤　　清

秘

第	2	部
原		著

分類
438—3
438—1
322—38

受附 16. 10. 1

井上の12本のうち9本の表紙にはマル秘のスタンプ
体内通過で病原性の増強効果がはっきりしていたのは海猟で、マウスは不安定な結果しか得られず、野兎は期待できなかった

⇨⇨⇨⇨⇨人体の兵器

2−4　石井機関紀要の論文が博士論文に
日本医学界と731部隊：嘱託

所属	名前	役割
東大	宮川米二、小島三郎、細谷省吾、柳沢謙	指導、学位審査
慶大	小林六造	指導、学位審査
京大	戸田正三、木村廉、内野仙治	指導、学位審査、学術会議
阪大	谷口腆二	論文寄稿
その他	緒方規雄（千葉医大）、谷友次（金沢医大）	指導

日付	タイトル	所管官庁
1941. 9 .17	総動員試験研究令命令研究　名簿（各省別）	企画院第七部
1943.8.30	科学技術者登録制策定要綱（案）に関する説明資料	技術院
1944.2	戦時研究員制度に就て	技術院
1944.2.14	研究動員審議室設置要綱（案）	技術院
1945.2	大東亜戦争技術挽回策（海軍技術大佐伊藤庸二）	第二海軍技術廠電波兵器部

2-5　博士論文とはどんなもの

論文の質の維持・向上に必要なことは？

年号	規定	内容
1877		西南の役、東京大学
1886	帝国大学令	京都帝大は97年（日清戦争）
1887	学位令	「博士の学位は文部大臣……之を授け」（第3条）博士と大博士
1898	学位令	大博士制度廃止
1907		東北帝大、11年；九州帝大（日露戦争、足尾鉱毒事件）
1918	大学令	医科大その他大学昇格（第一次世界大戦）
1920	学位令	文部省の認可を得て各大学が学位を出す、「印刷公表」義務化（例外規定：文部大臣ニ於テ其ノ印刷公表ヲ相当ナラスト認メタルモノ）
1945	敗　戦	
1947	学校教育法	新制大学の発足（第二次世界大戦）
1956	学位規則	取り消しおよび例外規定がなくなる

2-6 学位審査の実態 1 共著が単著に

小林六造慶大教授が審査した博士論文

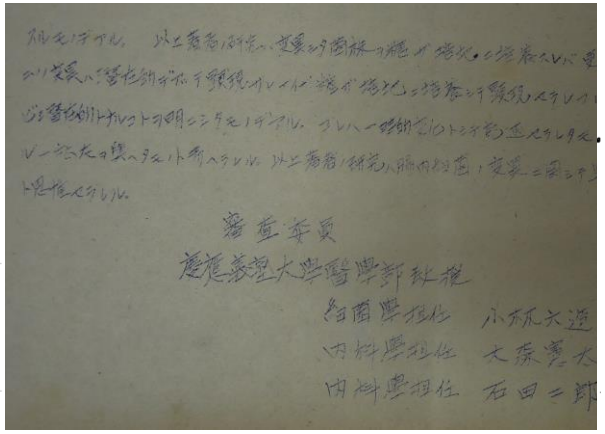
陸軍軍醫學校防疫研究報告
第2部 第808號

腸チフス菌ノ變異ニ就テ
第1編 各種糖類ノ本菌ニ及ボス影響ニ就テ

陸軍軍醫學校防疫研究室（部長 石井少將）
囑託 小林六造
坂口正雄
（慶應義塾大學醫學部）

第 2 部
原 著
分類 435—1 311—35
受附 昭和 19. 3. 11

808—2



審査年月
慶應義塾大學醫學部教授
細菌學担任 小林六造
内科學担任 大森憲太
内科學担任 石田二郎

坂口正雄「腸チフス菌の変異について」、1947.11.11 慶大、UT51-61-G368

陸軍軍醫學校防疫研究報告
第2部 第808號

腸チフス菌ノ變異ニ就テ
第1編 各種糖類ノ本菌ニ及ボス影響ニ就テ

陸軍軍醫學校防疫研究室（部長 石井少將）
指導囑託 小林六造
坂口正雄
（慶應義塾大學醫學部）

第 2 部
原 著
分類 435—1 311—35
受附 昭和 19. 3. 11

（陸軍軍醫學校委託研究）

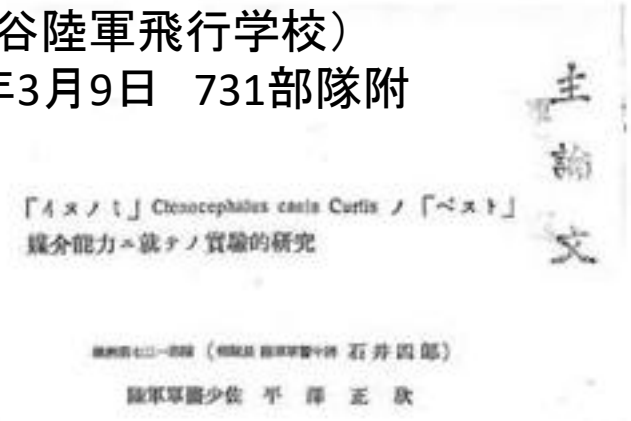
本論文ノ要旨ハ昭和18年5月慶德會委員會ニ於テ小林教授ニ依リ報告セラレタリ。

2-6　学位審査の実態　2　頭痛を訴える「サル」

平澤正欽の博士論文

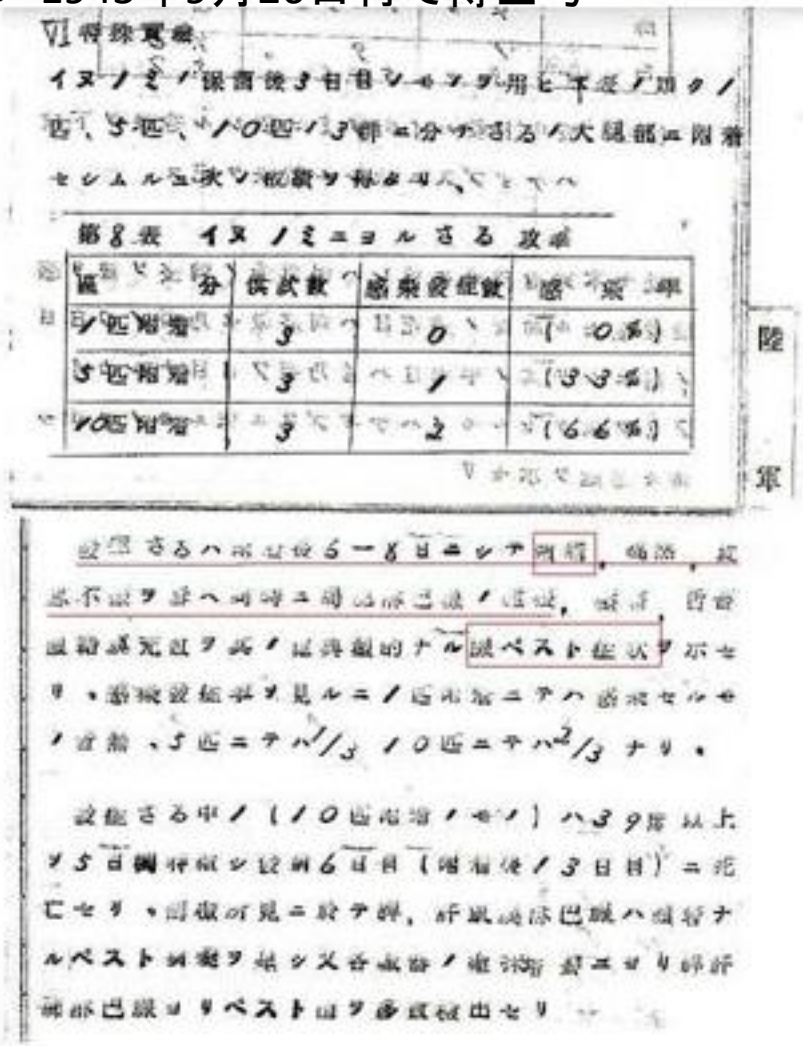
京大医学部　1945年9月26日付で博士号

1937年10月30日操縦術習得
（熊谷陸軍飛行学校）
39年3月9日　731部隊附


主論文

「イヌノミ」Ctenocephalus canis Curtis ノ「ペスト」媒介能力ニ就テノ實驗的研究

陸軍軍醫少佐　平　澤　正　欽


第8表　イヌノミニヨルさる攻撃

區分	供試數	感染發症數	感染率
1/10	3	0	(0%)
5/10	3	1	(33%)
10/10	3	2	(66%)

右の赤線部分は以下の通りだ。「発症さるハ附着後6-8日ニシテ頭痛、高熱、食思不振訴ヘ同時ニ局部琳派腺ノ…」

国会図書館請求記号　UT51-60-Q534
国会図書館関西館所蔵

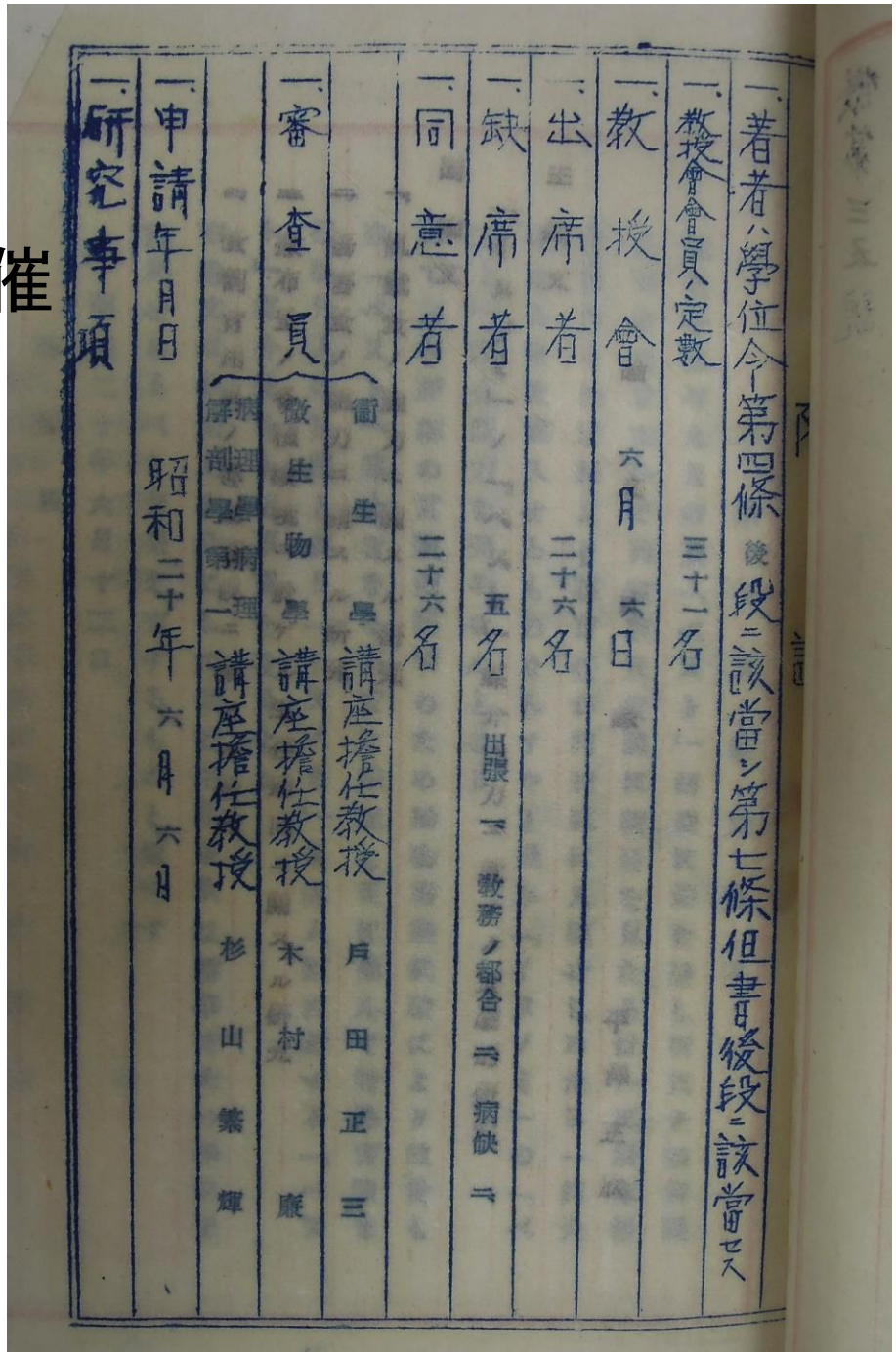
2-6　学位審査の実態　3

基本的人権侵害と虚偽記載

申請日（6月6日）に教授会を開催

評価のポイント：「更に進んで特殊実験を行い先人の見解と異りイヌノミも亦人類に対するペスト媒介蚤なる新事実を発見せり」

4條後段（論文博士）、7條但書後段（大臣による秘密認定）



一、著者ハ學位令第四條後段ニ該當シ第七條但書後段ニ該當セス

一、教授會會員ノ定數　三十一名

一、教授會　六月六日

一、出席者　二十六名

一、缺席者　五名　出張ノ一　教務ノ都合ニ　病缺ニ

一、同意者　二十六名

一、審査員
（衛生學講座擔任教授　戸田正三
微生物學講座擔任教授　木村廉
病理學病理解剖學第一講座擔任教授　杉山繁輝）

一、申請年月日　昭和二十年六月六日

一、研究事項

2-6 学位審査の実態　4 隠蔽と虚言

平澤の論文リスト

論文表題（授与年月日：1945年9月26日）	元論文
「イヌノミ」Ctenocephalus canis Curtisの「ペスト」媒介能力に就ての実験的研究	主論文
飢餓蚤の能力に関する研究	1部64号、19.3.20
障害蚤の能力に関する研究	1部65号、19.3.20
撒布蚤の各種環境に於ける生存期間に関する研究	1部73号、19.3.20
蚤飼育用鼠の運動制限に関する研究	1部74号、19.3.20

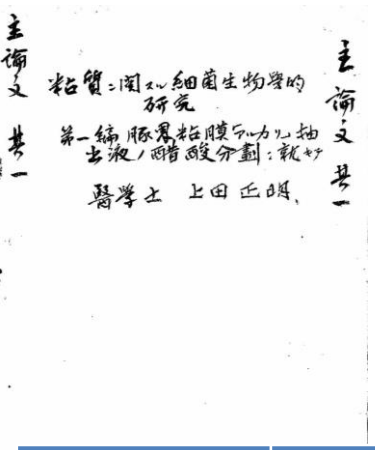
日本学術会議　第13回総会（1952年10月）ジュネーブ議定書批准推進決議が審議され否決（審査委員の戸田と木村が発言）

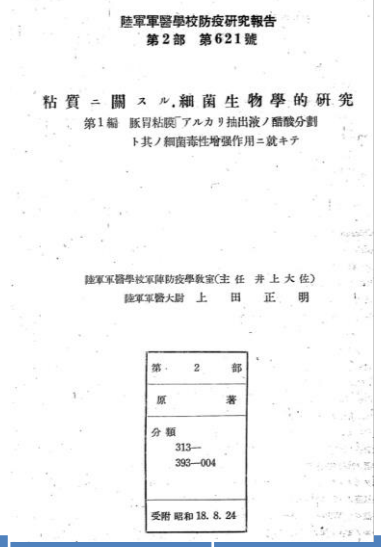
戸田：（生物兵器は）4、50年前に解決している問題でありまして、今日ほとんど実用になりません。実用にならぬものを苦労までして日本でつくるというばかが出ましたら、そんなばかなことをするなという勧告を私からよくいたしますから、どうかその点ご安心ください
木村：細菌戦が行われているということに対する科学的の根拠に基いてこういうものをおだしになったのかどうか

2-6 学位審査の実態 5

申請年月日、8.15 or 9.2

影を消す？





名前	テーマ	改ざん・不自然さ	授与	申請
宮崎、京大	破傷風	ガリ版刷り私製、主論文の出典を目立たぬよう付記	48.8	47.5
林、東北大	BCG	表紙の改ざんで出典を隠す、本文中の一部記述の墨塗	47.10.18	47.5
飯田、阪大	濾過器	表紙を新たに作り、紀要を隠蔽、参考文献表示	46.9.14	46.4.19
樋渡、慶大	野兎病	手書きで、既発表なのに出典の記載ない	47	46.3.11
上田、京大	粘質	表紙を改ざんvs.参考論文、タイトル改ざん	46.4.15	45.8.24
		敗　　戦		
坂口、慶大	チフス	加筆「指導」	47.11.1	45.6.12
平沢、京大	イヌノミ	申請と教授会開催日が同一日「頭痛を訴える猿」	45.9.26	45.6.6
金子、東大	雨下散布	申請から教授会まで４年弱、石井の細菌戦理論	49.1.10	44.12.15
遠山、慶大	チフス	共著論文（小林六造）を提出	45.11.27	44.12.27

2-7　学と軍の癒着の実態

✧科学のより良い環境を求めて・質の維持向上

✧「５　学位審査の実態　１」で見た例は、陸軍軍医学校委託研究に弟子を使い、それで弟子に学位を取らせている

✧共著論文を弟子の単著論文に偽装・改ざん

✧軍の施設や研究費を自分たちの研究に利用したつもりが、学問研究の自律性からの逸脱

✧「公表」例外規定の問題、誰が判断するのか

2-8-1 なぜ今？『永続敗戦論』の世界 ＝明治維新150年

結核、沖縄と本土：RCT(ランダム化比較試験)

- ✧ 1951年日本では「結核予防法」が施行
- ✧ 戦前の沖縄の結核のまん延状況は「他の府県と比較すると最も死亡率の高い府県」
- ✧ 51年本土と沖縄で、それぞれ別々の結核制圧策が、本土は戦前と同様のBCGの集団強制接種、他方米軍統治下の沖縄では、米国本土に習いBCG接種は行わず、患者の早期発見と治療が柱
- ✧ 沖縄が本土復帰するのは1972年だが、厚生行政などはそれに先立ち67年から先行実施され、BCG接種が始められた
- ✧ 人口10万人あたりの結核による死亡率は、34年には全国が190.8で、沖縄は234.3だったのが、1968年にはそれぞれ、16.8と14.3と逆転していた（森亨、『結核』46巻、９号、1971年）

結核予防法が施行された51年、武見太郎は歴史を踏まえて「結核撲滅策の撲滅」にこう記している。「強兵のための結核対策……軍事保護院や、それに便乗した日本結核予防協会のやり方は、正に狂気の沙汰であった……BCGがこのファッショ的時代から強制されたものであることも、銘記する必要がある」（『文藝春秋』29巻５号、1951年）

2–8-2　なぜ今？『永続敗戦論』の世界
＝明治維新150年

- なぜ繰り返されるのか
- 検証（反省）
- 人間の価値展（西ドイツ医師会：1989年）
- ７３１部隊展（市民団体：1993年–94年）